

2017年  
11月1日  
No. 105  
隔月1回発行

特定非営利活動法人  
レター・ポスト・フレンド相談ネットワーク会報

ひきこもり



イラスト 高津 達弘

## Index

- 2ページ 「ひきこもりサテライト・カフェ in 小樽」事業説明懇談会を開催  
ピアが織りなすチカラとともに働き合うジョブサポートが終了
- 3ページ 晩秋の円山・地域めぐり登山～四季折々の変化を眺める ほか
- 4ページ 当事者が社会参加しやすい地域づくりをめざして
- 5ページ 当事者手記「水鏡に、つゆ玉ひとつ」③
- 6ページ 無知、無関心ではいけない！伊深正英さんが語る④
- 7ページ ひきこもりサポーター養成・インターネット配信研修会  
札幌市議会でのひきこもり対策について質疑～実態調査を検討
- 8ページ こちら事務局／編集後記

会報は、公益財団法人北海道地域振興協会・平成29年度ボランティア活動支援事業助成金により作成されています。

ひきこもりサテライト・カフェ  
小樽市で事業説明懇談会を開催

10月26日、当NPOが札幌圏域の地域にアウトリーチしてひきこもりで悩む当事者や家族を対象とした居場所づくりをすすめる「ひきこもりサテライト・カフェ in 小樽」の事業説明懇談会が小樽市総合福祉センターにおいて開催され、北海道新聞小樽・後志版に掲載された(写真1)。本事業は参加者に有益な情報を提供し、お互い支え合える関係性をつくることを目的に実施、説明懇談会には当事者の家族約10名が参加した。田中敦理理事長は「11月と12月のカフェでは、ひきこもりから回復した当事者らも参加してその体験からお互い学び合い交流を深める」と説明した。サテライト・カフェは、事業説明会を含め今年度6回開催する。



(写真1) 2017年10月27日付  
北海道新聞小樽・後志版

(田中敦理理事長のコメント)

北海道は本州の首都圏とは異なる特性をもっている。広大な距離から交通費がかかり札幌に拠点を置いても全道域の人たちが集まることはなくイベント系は別にしてひきこもり当事者だけが数十人集まることはない。地元の人たちが安心して足を向け参加することができるか？ここに地域福祉の考え方があ

る。ひきこもりの無理解があるなか周囲に知られたくないと思う人たちが多く、当事者だけではなく家族までひきこもりという地方圏の現状を開拓していくためには「先行く当事者や経験者」が活動していく地道な努力が問われる。

ひきこもりサテライト・カフェ in 小樽

開催日時：  
10月26日(木) 11月16日(木)  
12月20日(水) 2018年1月25日(木)  
2月22日(木) 3月22日(木)  
午後2時00分から午後4時00分まで  
開催場所：小樽市総合福祉センター4階和室  
住所：小樽市花園2丁目12番1号  
参加対象：ひきこもり当事者及びその家族  
参加費：無料 ※事前申し込み不要  
後援：小樽市

ピアが織りなすチカラとともに  
働き合うジョブサポートが終了

10月29日、当事者から捉えるひきこもりの回復後における就労定着促進事業フォーラム「ピアが織りなすチカラとともに働き合うジョブサポート」が、北翔大学北方圏学術情報センターPORTOの会議室で開催された。当日は北海道内外から、ひきこもり経験を持ちながら現在働く6名の講師が登壇、労働とどのように向き合い、働き続けているのかを語ってもらった(写真2)。会場には物販を含め42名の参加者が集い、各講師の話を通じた交流を深めた。フォーラムの詳細内容は次号で紹介する。

また、ひきこもりからの回復後に焦点を当て、実際労働しているひきこもり経験者などに対して個別インタビューによる聞き取り調査を札幌・函館・旭川・帯広で実施した。フォーラムや個別インタビューから導き出せるひきこもり当事者の就労定着促進に及ぼす影響や効果について来年3月までに報告書を制作し頒布する。



(写真1) フォーラムに登壇した6名の講師陣

## 晩秋の円山・地域めぐり登山く 四季折々の変化を眺める

11月1日、かねてより登山好きな当事者と計画していた「晩秋の円山・地域めぐり登山」を休みながらゆつくりと2時間かけて行った(写真2)。

先日の台風の影響で落葉広葉樹の葉はほとんど落下し落ち葉のカーディングロードになっていた。日頃からからだをあまり動かさないで発汗や息切れとなって自身の健康のバロメーターとなるため、決して無理をせず休みながら歩く。途中、冬支度をしている「エソリス」と遭遇し、私の足元を通り忙しくエサを探していた(写真1)。

円山は原始林として古くから手が加えられないで存在しており四季折々の変化をみるこ



(写真1)

(写真2)

とができる。そのため幅広い年代層の方が訪れている。札幌市は円山公園内に管理事務所を設置、円山の自然をよく知ることもできる。

ここは私たちの自然観察のフィールドワークの一つになっている。写真を通して北海道札幌円山の晩秋を感じとっていただければ幸いである。(田中 敦)

### 「ひきこもり仕事」

#### 共同通信社取材が終わる

10月18日、共同通信社(東京)の記者が来道し当NPOの自助会を訪れ翌19日にはインターネットを活用した在宅ワークについて、アイタ企画代表・屋代育夫さんとともに田中敦理事長、吉川修司理事へインタビューを行った。また、同記者は29日に開催した「ピアが織りなすチカラ」とともに働き合う「シヨブサポート」に参加。前日の講師打合せの席に出向き取材を敢行。年内に「ひきこもりと仕事」に焦点を当てた連載記事が掲載される予定。

### 厚生労働省・就労準備支援事業 研修会を理事長が担当

10月11日、厚生労働省主導の就労準備支援事業(任意)研修会に参加してきた。今回は専門職というよりはNPOの立ち位置で、

対象者別の特性理解(1)・ひきこもりを担当した。中高年ひきこもり当事者の心のあり方や家庭の状況、生活課題をはじめ、当法人が取り組む実践活動について紹介した。ひきこもりに焦点を当てた研修は今回がはじめて。北海道の地から発信できたことは大変有難く、このような貴重な機会を与えてくださった皆さまに心から感謝申し上げます。

北海道中高年ひきこもり就労準備支援事業理解啓発リーフレット【無料電子書籍】  
[http://dopub.jp/products/detail.php?product\\_id=788](http://dopub.jp/products/detail.php?product_id=788)

### 新刊図書紹介「地域における ひきこもり支援ガイドブック」

ひきこもり状態にある人にとってもっとも重要なのは魅力的な居場の確保であることから本ガイドブックでは、魅力的な居場所をどうつくりその居場所にとつなげ支援していくかを紹介している。

また本ガイドブックは、長期高齢化するひきこもりの人たちの生活困窮を防ぐために生活困窮者自立支援法を踏まえたひきこもり支援のあり方を、当事者視点から提案する。

このガイドブックのピアサポートについては、田中敦理事長が執筆を担当。生活困窮者自立支援研修テキストとして幅広く活用されることを願っている。(A5版・230頁、定価3454円・金剛出版)

# 第1回中高年ひきこもり当事者のライフプラン学習会 当事者が社会参加しやすい地域づくりをめざして

一般社団法人やまなしピアカフェ代表理事の永嶋聡氏（写真）を招いた第1回中高年ひきこもり当事者のライフプラン学習会「当事者が社会参加しやすい地域づくりをめざして」が9月17日北翔大学北方圏学術情報センターポルトで開催された。当日新聞報道があり新聞記事を切り取り飛び入り参加する市民を含め30名の参加者が集り、このテーマに対する関心の高さが改めて伺えられた。

講演の冒頭で示した3つの数字「17606」「4000」「23」は、順に永嶋氏が生誕後現在まで生きてきた日数、ひきこもってきた日数、職業を変えた数。「自信はないけどプライドは高い」と過去の自分を分析する永嶋氏は、職を転々とし40歳になってから5年間ひきこもった。

毎日7～8時間インターネットだけをみてさまざまな情報を仕入れる中、一時はお坊さんになることまで考えた。ニコニコ動画でジャーナリストの池上正樹氏の話を読み初めて自分が「ひきこもり」だと自覚。インターネットオークションで物売り、少額の収入を得るものの「このままではダメだ」という思いから山梨県で立ち上がったばかりの当事者会と家族会へ行きはじめ、「もう隠すのはやめよう。本当のことを正直に語り、助けを求めよう」と決意し、『45歳のひきこもりです』と書かれた名刺を作成して何か自分のできることから始める準備をした。それが功を奏し家族会の役員となりボランティアとして家族会の中に当事者会をつくった。

ひきこもり支援を一から学ぶため、池上正樹氏をはじめ各地で実践的に行ってきた人たちと直接会って研鑽を積んできた。さまざまな人たちに支えられてきたというよりは「さまざまな人たちの生き方を見せてもらったことで助けられてきた」と振り返って語った。また統合失調症の当事者であるシェリー・ミード（Shery Mead）の「私は自分を問題の魂のように感じ始めました」を引用し、一方的に助けをもらう側にいることに対する支援をしたがる人たちの課題を指摘。当事者もとらわれから自由になるためにひきこもり大学思い込み学科と同時に開いた併設展に300点以上寄せられた「箱の中の声」を紹介しながら、永嶋氏自身の「ひきこもりだって貢献したい!」をはじめ、就労しても事が上手く進まない「うらやましいね」という言葉や「ひきこもることも許されなかった」という家庭の諸事情で投薬を受けながらも働き続けている当事者などの思いが伝えられた。

学習会の質疑応答のなかでは、仲間を増やし当事者会をはじめたいという、ある参加者からの質問を受け永嶋氏は「すべてみんなで何かを決めていきましょうというやり方は難しい。ある程度方向性を決めてそれに賛同する人たちでやったほうがよい。何かをやっていくためにはリーダーやキーマンは必要であるが、みんなの要求を実現しようと頑張ってしまうスーパーマンになってしまっただけではいけない。何か困っているときにロールモデルをもってその人に相談できることは大切」とアドバイスした。



（写真）講演する永嶋 聡氏

## 私たちの仲間になりませんか 会員募集をしています

レター・ポスト・フレンド相談ネットワークは若者の範疇に入らない成年・壮年期のひきこもりへの対応に軸足を置きながら、ひきこもり当事者が社会に出たとき、自信や希望を持ちながら歩めるような新しい働き方を、当事者自らが創造しています。

ぜひ多くの方々に、私たちの活動の趣旨を理解していただき、ひきこもり当事者が自信をもって生きていくことのできる、新しい社会のあり方をみなさんとともに追求していきたいと考えています。

| 正会員                      | 賛助会員                     | 寄付金        |
|--------------------------|--------------------------|------------|
| 入会金 1,000円<br>年会費 3,000円 | 入会金 1,000円<br>年会費 2,000円 | 一口 1,000円～ |

入会金、会費納入は、下記郵便振替口座へのお振り込みでお願いします。

●口座記号番号 02700-4-66261 ●加入者名 レター・ポスト・フレンド相談ネットワーク

## 水鏡に、つゆ玉ひとつつ③ 小西恵司

## 『一生の傷・無理な文句』

私は身体も心も男ですが、変えられない事実には非難や嘲笑をする行為は、悪行です。未だに忘れられませんが、私が小学5年生の頃の話です。お正月に親戚一同が父親の本家に集まって、久しぶりの再会に皆で談笑していた時のこと。私と私の父母、兄もいました。そろそろ思春期へ突入する手前な私ですので反抗心も出てしまうこともあり、親にとつては気に入らない言動やうっ憤もあったのでしようが、父親から衝撃的な言葉が飛び出したのです。

「俺の子供は、一人目は男だった。だから二人目は女がいいと思っていた。でも男が生まれやがった。」そして私を睨み付けました。単なる冗談として受け止める余裕があるのは、所詮他人ごとである私の周囲にいる人間です。案の定、みんな私の顔を見ながら全員で高笑いをしたのです。母や兄までも…。その時、私へ向けられた一人の視線と表情は今でも記憶が鮮明です。私はじっと耐え、笑うこともできずに歯を噛みしめていましたが、逆にその表情が面白みに火をつけた部分もあるかと思えます。当時の私は、ここに至るまでの両親の浴びせる「そと

づら」をよくする無理難題が、あまりにも重すぎて倒れそうでした。そんな時にこの言葉です。心にナイフを突き刺す言葉へ化けてしまうのは言うまでもありません。言葉の真意を冷静に考えて解釈を変えることなど、できるわけがないのです。心に余裕が無いのですから…。

自宅へ帰って更なる追い打ちが待っていました。心は非常に淋しく、辛いです。思わず母親に傷ついたことを言いました。しかし「そんなこと何だっけ言うの？ すべてにふて腐れる、お前は。」この言葉しかありませんでした。その日、トイレの中で自分の性器を切り落とそうとハサミを持ちながら、ひっそりと泣いた事は忘れることができません。このハサミで切り落とせば、みんなに認められるのかな…。そう思っていたのです。

未だに私の家族や親戚すら知らない事実です。もちろんハサミで切り落とす事はできませんでしたが、汲み取り式のトイレだった、あの臭気漂う空間に虚しく立ちすくむ私は、床下に溜まる「し尿」よりも汚い存在なのだと思いついてしまった瞬間でした。それを抱えて中学生になり、思春期を迎えて自分の性が芽生え、男女を意識し始め

ます。

しかし、私の中にある男という性は複数の人間に嘲笑され、否定されたままです。身体の成長と心は一致せず、乱れて暴走しているのです。でもそれを表へ出せません。なぜなら、両親は「そとづら」のよさを重視する考え方なのです。心身の不一致から発生する自分の暴走を抑えながら、今度は受験戦争へ駆りだされ、両親からは更なる重圧がかけられる毎日にもなるわけです。案の定、中学校生活はまさに地獄絵図でした。その地獄は高校生活を飛び越えて、大学、社会人生活に至るまで更に続くのですが、今考えると、よく私は生き抜くことができたな、と思います。

## 『理解するチャンス』

私が二十歳を迎えた頃、思い切った母親に、親戚一同の前で父親が言ったことを振り返るように話したことがあります。母親は覚えていたようですが、「女が良かったらしいね…。」、この反応です。これが良いか悪いかは別にして、「私」が受け止めた事の重さを、他人がイコールの關係で理解しているかと言えば、それはほぼ間違いなくノットイコールです。例えば親子間で愛情があるにしろ、物事の解釈の違い、自分の人間として与えられたベアスや事情、それは個々人すべてが違つのですから違つて当然です。

しかしこの真実は、こうも考えられます。軽く考える他人がいるからこ

そ、人の真実を本当の意味合いで理解する機会が必ず何らかの形で巡ってくるのです。なぜなら、心の土台をガタにして成長しても、自分が歪むからです。その自分を隠しきれず、耐えられず、何らかの形として出てくるからです。「ひきこもり」という社会現象は私の勝手な意見ですが、親子間でも他人同士であっても「コミュニケーション不全」が起こっていること、正しく理解しているかどうかは別にして「人の心を理解しようとしないう姿勢」が問われているひとつの形なのだと思います。しかし、残念ながらそれを理解するチャンスと考えられる人は、恐らく少ないでしょう。

## 『愚の骨頂』

最近はどうやく、同性愛・両性愛者、トランスジェンダーの方々への理解が深まりつつありますが、私は、一生消えないこの出来事からLGBTの方たちが抱える虚しさは、どこか理解できる部分があります。変えられないものは、どう頑張っても変えられません。それに文句を言うのは「愚の骨頂」です。努力や日頃の積み重ねで変えられるものと、変えられないもの…、感情的になってそれを混同する言動をしてはいけません。冗談、では済まされないので。

## 無知、無関心ではいけない！伊深正英さんが語る ④

心療内科へ通いながら札幌で生活保護を受け生活を続ける伊深正英さん（41）は2017年の現在、少しずつ自分の生き方を取り戻しているかのようにみえる。社会からの要請として「これからどのように生きていくのか」が問われる日々は続くなか、伊深さんなりの社会のあり方や他者との関係について尋ねてみました。（インタビュー：杉本賢治）

### ◆SNSを通して感じたこと

ひきこもった生活をしているとネガティブな考えに陥ってしまいますが、1年前からフェイスブックをやり始め、社会的な活動をする人たちの発言を眺めるだけで、元気をもらえるようになりました。直接的な活動はできないけどシェアすることで、その人たちの活動を他の人に知ってもらうことは今の自分にもできるので、人のためになることは自分のためになると信じて活用しています。最近は自分なりの表現もできるようになり自分の言葉で発信することもあります。

気になることは、テレビや新聞の報道を見た人が人それぞれで違う捉え方で受けとめ、それをSNSで発信することで偏りがでてしまうこと。答えは一つではないけれど報道をただ鵜呑みに理解して発信するのはよくないと思います。

（SNSで様々な人たちと知り合うことで）究極的には人が生きるってことは何なのかを考えてしまいます。テレビに出てスポットライトを浴びる人たちだけの社会ではないはずで、一般の生活者もその人なりの個性を持っています。そういう人たちも一人の人間として尊重されるべきだと思います。

### ◆この子らを世の光に～共生の姿勢で生きていく

人は大人になるにつれて腹黒さが目立ちます。自分が有利になるために効率さを優先して人間性をそぎ落として生きていると思います。それは社会の発展過程で植え付けられたものですが、前ウルグアイ大統領のホセ・ムヒカさんは「目に見えない人とのつながりや、愛情、思いやりを大切にして日本人のルーツに立ち返ってください」と言っていました。『晴耕雨読』や『起きて半畳寝て一畳』という言葉からもわかるように、日本人は慎ましく生きてきた人種だったはずなのに、経済発展の中でお金とモノ、名誉や肩書の中に価値観を見出して生きることで、本来持つべき大切なものを見失ってきたと思います。生きるためにお金は必要だけど、最低限あれば生きてはいけるので物理的な豊かさより心の豊かさを大切にしてほしい。

相模原障害者施設殺傷事件で知ったのですが、重度障がい者や孤児を救済するために居場所づくりに奔走し、日本の障がい者福祉の基礎をつくったといわれる糸賀一雄さんの残した言葉に『この子らを世の光に』があります。障がい者でも輝いているんだよという教えは、社会の底辺に置かれた人たちであっても個人として尊重することの大切さを説いています。社会的な風潮で非生産的な人たちはお荷物だという意見もありますが、あらためて共生の姿勢で生きていく必要があると感じます。

### ◆読者へのメッセージ

私はまだ精神的な部分で不安定なところはありますが、これまで話してきたように問題意識は自分の中にあるので、それが意味生きていることにつながっています。ひきこもっている人に限らず一人ひとりがいる場所でその人ができることをすることが大切だと思います。社会の固定概念や先入観にとらわれずに角度を変えて身近にある困りごとに関心を寄せてみる、自分に関係がないと思っていても以外に密接な関わりをもつこともあります。他人事（ひとごと）を自分事として捉えて何かやってみるとそれだけでも視野は広がります。そんなことを日々実感しています。

4回にわたり連載してきました。取材に協力いただき心より御礼申し上げます。

皆様からの投稿をお待ちしています

〒064-0824 札幌市中央区北4条西26丁目3-2

「NPO法人 レター・ポスト・フレンド相談ネットワーク」事務局 通信編集部 宛

e-mail ; info@letter-post.com

## ひきこもりサポーター・ インターネット配信研修会

平成21年度からすすめられてきた厚生労働省のひきこもり対策推進事業では、ひきこもりの長期、高齢化や、それに伴うひきこもりの状態にある本人や家族からの多様な相談に答え、継続的な訪問支援を行うことを目的として平成25年度より「ひきこもりサポーター」の養成研修を都道府県で実施してきた。

「ひきこもりサポーター」養成研修は、ひきこもりで悩む本人や家族へのボランティア支援（当事者経験者によるピアサポーターを含む）に関心のある方を対象に、ひきこもりに対する知識や支援方法を習得し、研修終了後サポーターへの名簿登録に同意した方を当事者宅へ派遣して地域に潜在するひきこもりを発見し、また誤解されやすいひきこもりの理解啓発へつなげる。

北海道ひきこもり成年相談センター、札幌市ひきこもり地域支援センターを運営するところのリカバリー総合支援センターでは、今年度全3回に渡り「ひきこもりサポーター・インターネット配信研修会」を実施し、8月から9月にかけて第一回「基礎編・ひきこもりについての基礎知識、基本的な対応方法」が配信された。

第一回研修会では、ところのリカバ

リー総合支援センター精神科医の阿部幸弘氏が、同センター・コーディネーターの三上雅幸氏とともに、ひきこもりの基本的な概念や精神保健医療と支援機関との連携の必要性など支援の大枠についてわかりやすく解説した。

阿部氏は、研修会の最後に「ひきこもりが様々な要因で悩んでいることや、引っぱりだそつとする支援だけではないことを理解してほしい」と強調し、適切な支援を一律に受けてもらえない安心感を悩んでいる人たちに提供したいという強い意志を感じさせた。

阿部氏の手書きイラストによるひきこもりの説明は、型にはまった研修会の雰囲気や和らげていた。また清廉さがある若い司会者と阿部氏や補足説明する三上氏とのやりとりも微妙なさじ加減で息が合っていた。映像収録のため多少さじこちなさもみられるが、気まぐれ部分は笑みを浮かべながら進めている阿部氏の懐の深さも光っていた。

インターネット配信研修会は、11月下旬に第2回「実践編」来年2月に第3回「応用編」が配信される予定。参加者は各回の研修終了後配布されるミニテストに全て正解したうえで次の研修を受けるシステムになっている。地域に根差した「ひきこもりサポーター」が多く輩出されることに期待が高まる

## 札幌市議会でもひきこもり対策について質疑実態調査を検討

9月26日、札幌市議会第3回定例会代表質問にて民進党市民連合の篠田江里子議員が女性活躍社会に向けた意識改革や若者の社会参加促進、さまざまな困難を抱えた子ども達の課題など13項目を質問。「ひきこもり」が代表質問として取り上げられることが少ない中、「ひきこもり対策」も重要事項として札幌市に対して問いかけた。

篠田議員の質問事項では札幌市はこれまでひきこもり支援について、主に40歳未満の若者支援として、教育委員会から子ども未来局に所管替えしてきたが、ひきこもりの長期化、高齢化に伴い40歳以上のひきこもり当事者が増加する状況を目の当たりにすると、はたして子ども未来局所管がふさわしいのか懸念することを指摘。前回の調査から6年が経過し、最も支援が必要とされる中高年の域に入った当事者や家族への具体的な支援策が新たな問題として浮上していることから、改めてひきこもりに関する詳細な実態調査を早急に実施することが求められると述べた。

そのうえで札幌市「ひきこもり地域支援センター」が設置され、この間の状況はいかがか？また、40歳以上も対象に含めた実態調査を早急に実施す

べきと考えますがいかがか、また、本人や家族を支える民間団体との連携を今後どのようにすすめていくお考えなのか、を代表して札幌市に質問した

これに対して札幌市の岸光右副市長からは「まず札幌市ひきこもり地域支援センターの相談状況について、年齢を対象を区切ることなくひきこもりの家族や当事者からの相談にに応じている。平成28年度の新規相談件数は284件、延べ相談1130件、そのうち40歳以上の割合が全相談者の27.1%、50歳以上では9.5%を占めている。また、40歳以上を含めたひきこもり実態調査実施については、これまでの相談者が相当数いることが判明しており、初回調査から6年以上経過した現状から札幌市としてはひきこもりの実態把握と適切な支援をすすめるため調査の実施を検討していきたい。さらに当事者と家族を支える民間団体との連携については、ひきこもり地域支援センターには多くの相談が寄せられているが、相談に結びついていない当事者がおおおくいるものと考えている。今後は当事者に寄り添いながら活動している民間団体との連携をより一層の強化を図り、どこにも相談できず、悩みを抱えているひきこもり当事者や家族を相談につなげる取り組みを広げたい」と答弁した。

### ◆「SANGOの会」例会のご案内

2017年11月~12月は下記日程にて行います。初めての方も参加できます。概ね35歳前後のひきこもり当事者や経験者で、人との関係や会話に慣れたいと思っている方、またいろいろな情報を得たいと考えている方は、いらしてください。詳細は事務局までお問い合わせください。初めて参加される方で、少人数で会うことを希望される方は、事前に事務局までメール、電話で問い合わせのうえ初心者例会にお越しください。

#### 《初心者例会》

と き：①11月23日(木) 午後1時30分から午後3時30分まで  
②12月21日(木) 午後1時30分から午後3時30分まで

会 場：①札幌市社会福祉総合センター4階 ボランティア活動室  
②札幌市社会福祉総合センター3階 第二会議室

#### 《通常例会》

と き：12月6日(水) 午後1時30分から午後3時30分まで

会 場：札幌市社会福祉総合センター3階 第二会議室

場 所：札幌市中央区大通西19丁目 (地下鉄西18丁目駅下車徒歩5分)



### ◆北海道社会福祉士会道央地区支部が開催する会員サロンのご案内

会員サロンは、会員等が定期的に集まり、資質向上、意見交換を行い、参加者が交流の機会を通じて、分野を超えたネットワークを広げることを目的にします。今回、当法人が主宰するSANGOの会のメンバーが講師として登壇します。

と き：12月1日(金) 午後6時30分~午後8時00分まで(予定)

会 場：札幌市社会福祉総合センター4階「視聴覚室」

テーマ：「当事者の声に耳を傾ける - 相談援助の原点に立ち返る - 」

講 師：ひきこもり経験のある方及び精神疾患をお持ちの方

参加費：本会会員は無料。非会員は500円 定 員：50名

申込み方法：参加申込書に必要事項を記入の上11月24日(金)までにFAXで申し込む。

※詳細は北海道社会福祉士会道央地区支部ホームページをご覧ください。http://douou-csw.jp/

### ◆こころのピアサポートフォーラム2017in旭川「ひきこもりってなあ〜に？」開催のお知らせ

第一部「知ろう!当事者の話・当事者会の話」では当NPOの武田俊基理事、旭川当事者会NAGIの植西あすみ氏、旭川そよ風の会代表の内島貞雄氏が登壇します。

と き：12月16日(土) 午後1時30分から午後3時30分まで

会 場：旭川市障害者福祉センターおびった2階会議室1

場 所：旭川市宮前1条3丁目3-7

参加対象：ひきこもり当事者経験者とその家族、支援者など 参加費：500円

申込み方法：参加申込書に必要事項を記入の上、12月6日までにEメールまたはFAXで申し込む

問い合わせ先：旭川市障害者総合相談支援センターあそーと(おびった内)まで

### ☆編集後記☆

当事者会やその活動に家族や一般の人たちの参加を認めることは、当事者性という視点に立てばどうでしょう。横から余計なおせっかいか口出しされることで本来の「当事者らしさ」がその場から消えてしまうのは残念なところ。支援をしたがる人たちには、自己欲求を満たしたい人たちが多く見られます。そういう人たちには当事者活動を支える方法として金銭的な後方支援というカタチがあることを伝えています。

(発行責任者 理事長 田中 敦)

無断複製はおやめください